

レイモンド・カーヴァー「ささやかだけれど、役にたつこと」 に関する一考察

菊池 せつ子

A study of “A Small, Good Thing” by Raymond Carver

Setuko KIKUCHI

Abstract

Raymond Carver, master of the American short story, dies in 1988 at the age of fifty, sending his late-blooming and short life. He recovers alcoholic in his late life, obtains the best partner, Tess and comes to carry out a new literary start in the environment blessed as a writer, winning some awards.

The theme of “A Small, Good Thing” in Cathedral, the best collection of his short stories will be studied, following Carver's short life and comparing this work with “The Bath” in What We Talk About When We Talk About Love.

This story, “The Bath” is marvelously written by Carver's minimal art which stirs memories of Ernest Hemingway. Carver's minimal art achieves maximal effects. In the paradoxically lyric way of the minimalist writer, he has not only made sense of this world, he has given it value.

Written in the simplest of styles, mirroring the language of everyday life, this story “The Bath”, possesses an awesome mesmerizing power. It suddenly brings about fear of everyday life in its characters, a good couple, Ann and Howard who lead their life peacefully. Out of the moments when good luck runs out, Carver makes the highest art.

In “A Small, Good Thing” he succeeds in weaving the illusion that his characters are not only real but representative. This story contains astonishing achievements, which bespeak a writer expanding his range and intentions. It overflows with the danger, excitement, mystery, and possibility of life. Its main characters come to obtain mental enhancement of relation and relief called “brightness”

Carver is a writer of astonishing compassion and honesty. His eye sets only on describing and revealing the world as he sees it. His eye is so clear, it almost breaks your heart. This story shows a gifted writer struggling for a larger scope of reference, a finer touch of nuance. There is a strangeness, the husk of a myth in this story.

Key words : fear of everyday life, relief called “brightness”, mental enhancement of relation

キーワード：日常性の恐怖, 「明るさ」という救済, 精神的なつながりの深化

はじめに

従来の作品と同じ題材、同じ設定の作品にも初期の作品との違いは見られるが、特にそれまでの作品との違いを感じるの『大聖堂』(Cathedral, 1983)という短編集に収められた「ささやかだけれど、役に立つこと」(“A Small, Good Thing”)である。この作品は『愛についてわれわれが語るときわれわれの語ること』(What We Talk About When We Talk About Love, 1981)所収の「風呂」(“The Bath”)を書き直したものである。カーヴァーの生涯をたどりながら、この二作品を比較し、「ささやかだけれど、役にたつこと」のテーマを考察する。

『愛について語るときわれわれが話すこと』という短編集は1981年の4月に大手の出版社クロップフから出された。カーヴァーにとって『静かにしてくれないか』(1976)『怒りの葡萄』(1977)に続く三冊目の短編集にあたるが、その完成度は飛躍的に高くなっている。文学性を増し、作者の視点がより普遍的な人間の営みの哀しみやおかしみの方に向けられている。そしてカーヴァーの文学の頂点とも言える次の作品集『大聖堂』へと至る。

『愛について語るときわれわれが語ること』に収録された殆どは1977年から81年にかけて執筆された。1970年代中ごろを様々な形の肉体的、精神的ストレスに苦しめられて過ごし、この時期にはあまり旺盛な創作活動を行っていない。妻と子供たちとの不和に悩んだカーヴァーは、1976年から翌年にかけて、急性アルコール中毒のために四度も入退院を繰り返している。彼が人生の最高のパートナーとなるテス・ギャラガーとめぐり合ったのは1977年のことで、彼はそれと前後してアルコールを断ち、精神的にも徐々に立ち直り、新しい生活と新しい文学的キャリアに足を踏み入れていくわけだが、そういう前向きな心持がこの作品集にもはっきり現われている。

1983年(45歳)の時、短編集『大聖堂』を同じ出版社から出す。これがピューリッツァ賞と全米批評家賞の両方の候補作になる。その年の5月、現存する作家に五年間に渡って贈られる助成金

「ミルドレッド・アンド・ハロルド・ストロース・リビング賞」(Mildred and Harold Strauss Living Award)の第一回受賞者となる。

恵まれた環境の中で、テスというすばらしい理解者を得て書かれた短編集『大聖堂』は小説の枠がぐーんと広がり、彼の喜びと自信が満ち溢れた小説となっており、新しい大地に足を踏み入れたカーヴァーの興奮のようなものがひしひしと伝わってくる作品集になっている。その中でも秀逸という評判の高い「ささやかだけれど、役にたつこと」に焦点を当て、カーヴァーが人生で追求めたテーマを探ってみることにする。

遅咲きの短い生涯

レイモンド・カーヴァーは(1938～88年)夏に、必ずしも平坦だったとは言えない五十年の短い人生の幕を閉じる。最後の一年間は辛い闘病生活を強いられたカーヴァーだったが、しかし癌であることが発覚する前の数年間は、若いころ望んでも得られなかった数々の栄誉や名声に恵まれることになる。八十年代のいわゆる「短編ルネッサンス」について語る時、ジョン・チーヴァーとともに必ず引き合いに出される作家としてカーヴァーがいる。現存する作家に対して、前述したように金銭の心配なしに創作に専念できるよう五年間の期限付きでタックス・フリーの助成金を贈るという制度が新しく発足し、その第一回目の受賞者が彼だった。すなわち「ミルドレッド・アンド・ハロルド・ストロース・リビング・アワード」という賞であり、この賞の受賞によってカーヴァーは創作一本でやっていけるようになり、それまで教えていたニューヨーク州のシラキュース大学での職を辞す。

同年83年には、カーヴァーの創作における新しい方向性を示唆する短編集『大聖堂』が大手の出版社から出され、この中に収められた「ささやかだけれど、役にたつこと」は定評のあるウィリアム・エイブラハム編「最優秀賞オー・ヘンリー賞」に選ばれる。

29歳のときには、短編「頼むから静かにしてくれないか」が『最優秀アメリカ短編集』の中に選

ばれた。さらに、1977年の6月2日は彼が完全に酒を断ち、アル中の生活から脱出した記念すべき日であったが、その酒を断って半年もたたぬ78年の1月には華氏マイナス36度になる厳冬のヴァーモント州プレーンフィールドにあるゴダール・カレッジに呼ばれて、二週間ほど大学の学生用の宿舎で過ごした。そのとき同じ宿舎で、トビアス・ウルフと出遭う。ウルフはその当時文芸雑誌に短編がいくつか掲載されていたものの、まだ著書と言えるものがなかった。

一方、カーヴァーも長いこと書いていなかったのもので、作家であるような気がしなかった。不安で眠られぬ夜を過したカーヴァーが明け方の五時に台所に言ってみると、なんとウルフがサンドウィッチを食べ、ミルクを飲んでいて。ウルフは慢性的な不眠症にかかっていたのである。アル中が癒え切れぬ者と不眠症に悩む者、二人の作家はともに自らの弱さを知り抜いていた。カーヴァーは後に「友情」という素晴らしいエッセイで次のように書いている。「この明け方、台所で二人して互いにいろんな話を喋り合うということが大切なことに思えた。外はまだ暗く、凍てつくような寒さで、時々木々がポキポキいっているのが聞こえるほどだった。流しの窓から北極光が見えそうだった」と。こうした出来事は、まさに「ささやかだけれど、役にたつこと」だったかもしれない。そしてこのような体験が、後の彼の著作に何らかの影響を与えたことは想像に難くない。

一方、ウルフはこの日からじまった友情について、あるエッセイで書いているが、その中でカーヴァーの強烈な印象として、彼の「飢え」に焦点を当てている。その一つの現れが、カーヴァーの食欲であり、彼の口は常にタバコを吸うか、何か食べているか、飲んでるかして、休むことなどなかったと言う。もう一つは、彼が人の語る話を食欲に求めていたということである。彼は人間的な規模の物語を、飽くことなく聞いたがった。われわれの善意がわれわれの環境や本性に対して強いられる、終わりのない負け戦に対しての物語を、だ。こういったカーヴァーの食欲に対する目を見張る性癖や、好奇心に満ち溢れた著作に対する姿勢もまた、彼が生み出す作品に無関

係ではないように思われる。

ミニマルな文体からナラティブな文体へ

カーヴァーにとって後年の創作には精神のリハビリ的な意味もあったわけである。具体的に見てみると、まずリハビリとしてやった創作の手始めは、小出版社から出した短編集の『怒りの葡萄』(77年)の中の数編を書き直すことだった。もともとカーヴァーは文章を削ったり付け加えたりして、書き直しというか推敲するのが大好きで、最初の草稿はあまり時間をかけずに書き、それから何十回となく原稿に手を入れたらしいのである。

昔二十歳そこそこで大学の創作科に入った頃、作家のジョン・ガードナーに叩き込まれた信念があった。ガードナーに言わせれば、作家は自分の書いているものを「見る」ことが大事であり、それは書き直しによって可能になり、したがって作品を書き直すことは、どのような段階の作家にとっても命なのだ。短編であれば、句読点ひとつでもおろそかにできず、作品の中のすべての言葉が重要なのだ、と。

しかし、このアルコール中毒回復期にカーヴァーが行なった「書き直し」とは単なる字句の訂正と言ったような生易しいものではなかった。一言でいえば、のちの「ミニマリズム」と呼ばれて評価されることになる「省略の美学」の実践であった。

このようにかつての作品をこれ以上はないくらいに削り取ることで、日常生活において、われわれが感じているが言葉にしきれない不安や恐怖感、そして虚しさなどが強調される作品に作り変えた。「風呂」は、人生をつつがなく穏やかに生きている中年夫婦の話で、ある日彼らの一人息子が交通事故に遭い入院し、しかも真夜中不気味なはずら電話に悩まされるといった物語である。この時期のカーヴァーはこのように日常生活の中で不意に襲われる不安と恐怖を扱う短編を多く書いた。

こうして、「ミニマリズム文学」の結晶ともいえる短編集『愛について語るときわれわれの語るこ

と』が生まれることになる。しかし、カーヴァーの「ミニマリズム」とは単に自分以外の人間にとってはどうでもいいような日常生活のちまちました苦悩や不安を書いたからそういわれるのではない。むしろ己の身を減ぼす寸前まで言ったぎりぎりの経験を、それ以上削れないというところまでの贅肉をそぎ落とし、贅肉どころか骨まで削って凝縮させたぎりぎりの文章によって書いたという事実によってこそ、そう呼ばれるべきなのである。

さて、カーヴァーと彼の最良の理解者で恋人であったテスは、アリゾナ州ツーソンからニューヨーク州シラキュースに移り、そして創作の上でも大きな転機がやってくるのである。結論を言ってしまうと、それは身を削るようなミニマルな文体から細った身体に肉付けを施す、ナラティブな文体への一大転換であり、いわば「ミニマリズムの文体」からのあつという間の決別だった。

日常性の恐怖

「書くことについて」、「焰」、「ジョン・ガードナー—教師としての作家」の三つはカーヴァーの受けた文学的影響と、彼の創作姿勢を知る上で有益なものである。「……日常の言葉、正常な談話の言葉、私たちが互いに交わす言葉……を使う重要性を、耳にたこが出来るほど教え込まれた」ことが述べられている。また、「ジョン・ガードナー—教師としての作家」にも同じ事が語られており、何を語っているのか常に自覚し、言いたい事を言うための「書き直し、推敲」の大切さをガードナーから教えられたことが述べられている。

前に述べたように、『愛について語るときわれわれが語ること』と『大聖堂』の間の決定的な差を理解するには、前者に収められた「風呂“The Bath”」と、この作品を書き直し推敲したと言われる、後者に収められた「ささやかだけれど、役にたつこと“A Small, Good Thing”」という二編を比較することが肝要と思われる。

カーヴァーとヘミングウェイの作品で使われている言語は「簡潔さと明晰さ、反復、話し言葉に近いリズム、外見描写の正確さ」の点で似ていると

言われている。カーヴァーはもったいぶった言い方をせずに淡々と簡潔に語るのである。そして、その通りの圧巻が言葉のやり取りである会話に表れる。この作品でカーヴァーが描くのはダイアログにおける緊張感、崩壊感である。

カーヴァーの場合は、日々の暮らしに満ち足りているという現実肯定ではない。どうにか生活を変えたい、いい暮らしをしたいと常に願っているが、どうにもうまくいかない精神的窒息状態にしながら、それでも毎日を送っていかなければならないという意味の現実肯定である。緊張感のある場面をスナップ・ショットのように捉えていた初期の作品の文体は、客観的なハードボイルド・スタイルの文体であった。そこにはカーヴァーの突き放した文体があり、したがって、感情表現が抑えきれない描写から、登場人物の心の機微をうかがい知ることが読者の楽しみでもある。

一人息子のスコッティ (Scotty) が、誕生日を迎えた当日自動車にはねられてしまう。両親ハワードとアン (Howard and Ann) は二人して病院で意識不明の状態にあるスコッティを見守る。病状がこう着状態のため、彼らは休息をかねて交代で帰宅することにする。最初に父親のハワードが帰宅することになる。玄関に向かってドアの鍵を開けようとすると、電話のベルが鳴っていた。彼が受話器を取ると、「ケーキをまだ取りに来ていませんね」電話の相手はそう言った。「何の話だい、それは？」彼は話の内容を何とか理解しようとするがわからずに切ってしまう。さらにハワードが風呂に入っている時にもその妙な電話がかかってくるが、息子の病状のことが心配で気が動転していることもあって、この電話を変質者の仕業だと思い込んでしまう。(実はこの電話は母親が息子のためにバースデイ・ケーキを注文したパン屋からのものなのであるが)

次に交代して家に帰った母親のアンに再び電話が鳴る。息子の病状に何か変化があったのではないかとビクビクしている彼女の心を逆なでするかのよう、電話の声は意味ありげに「息子のスコッティのことだよ」と告げる。実際は電話の主はパン屋の初老の男からであり、母親がスコッティの誕生日のケーキを注文したのに取りに来な

いたため、子供が事故にあったという事情を知らないパン屋がしつこく嫌がらせの電話をしていたのである。

The telephone rang. "Yes !" she said. "Hello ! she said. "Mrs. Weiss," a man's voice said. "Yes," she said. "This is Mrs. Weiss. Is it about Scotty?" she said. "Scotty," the voice said. "Scotty," the voice said. "It has to do with Scotty, yes."¹⁾

「はい！」と彼女は言った。「もしもし！」「ワイスさんですかね」と男の声は言った。「そうです」と彼女は言った。「ワイスの宅です。スコッティのことですか？」「スコッティ」とその声は言った。「スコッティのことですよ」と声は言った。「スコッティに関係あることですよ、ええ」以上のように「風呂」の場合は、読者にとって、未消化感を残して作品はここで終わってしまう。不気味な電話の物語は断ち切れサスペンスにも似た余韻が残る。意識不明の息子を抱え、いつ何時息子の病状に変化が生じるかわからない、緊迫した状況下に置かれた両親と正体不明の電話。カーヴァーが描きたいと思っていた日常性の恐怖感が「風呂」には張りつめている。この作品は直接的ではないが、車にはねられてしまい意識不明に陥った幼い息子を守る両親の死の予感と、彼らの不安をめぐるサスペンス仕立てとなっている。

「明るさ」という救済

一方、「ささやかだけれど、役に立つこと」では、物語はここから新たな展開を見せ、二人の一人息子のスコッティは死んでしまい、両親（ハワードとアン）が悩まされ続けた電話の主を突き止めることになる。息子を失った悲しみで増長された「殺してやりたいほどの怒り」を胸に二人は、パン屋に押しかけ彼を問い詰める。

"My son's dead," she said with a cold, even finality. "He was hit by a car Monday morning. We've been waiting with him until he died. But, of course, you couldn't be expected to know that, could you ?

Bakers can't know everything, can they, Mr. Baker? But he's dead. He's dead, you bastard!"²⁾

「子供は死にました」と彼女は冷たい平板な声で言った。「月曜日の朝に車にはねられたんです。死ぬまで、私たち二人はずっと子供に付き添っていました。でももちろん、あなたにはそんなことわかりっこないわね。パン屋に何もかもわかるってわけもないし。そうよね、パン屋さん？でもあの子は死んだのよ。死んだのよ、こん畜生。」両親から事情を聞いたパン屋は自分の非を認め心から二人に詫げる。「本当にお気の毒です」とパン屋は言った。彼はテーブルの上に両肘をついた。「何とも言いようがないほど、お気の毒に思っております。聞いてください。あたしはただのつまらんパン屋です。それ以上の何者でもない。昔は、何年か前は、多分あたしもこんなんじゃなかった……でも心からすまなく思っています。あんなのお子さんのことはお気の毒だった。そしてあたしのやったことまったくひどいことだった」と。

そして自らの孤独で悲しい人生を二人に語る。自分は邪悪な人間ではなく、「人間としてまっとうな生き方がわからなくなってしまった」とパン屋は二人に忠実に打ち明ける。そして、焼けたばかりのロールパンを二人に食べるように勧める。

"You probably need to eat something," the baker said. "I hope you'll eat some of my hot rolls. You have to eat and keep going. Eating is a small, good thing in a time like this," he said.³⁾

「何か召し上がらなくちゃいけませんよ」とパン屋は言った。「良かったらあたしが焼いた温かいロールパンを食べてください。ちゃんと食べて、頑張って生きていかなきゃなんのだから。こんなときには、ものを食べることです。それはささやかなことですが、助けになります」と彼は言った。

ハワードとアン夫婦は食べられるだけのパンを食べ、三人は夜明けまで語り続ける。もちろん、これで両親が何らかの「啓示」を受けて、ハッピー・エンドを迎えたとは言えない。そのような見方は安っぽい落ちを嫌う作者カーヴァーが納得しない

だろう。しかし、ここには明らかに「明るさ」があると思われる。この作品で作者カーヴァーがとった姿勢は人間の内部を描くヒューマニスティックな「明るい」姿勢と言える。

それは単に日常の「脅威」を描いているだけにとどまらず、自我と自我が対立し、語り合う人間の姿が描かれているからであろう。もちろん、ここには完全な「救済」があるわけでは決していない。しかしながら、人間関係の中に何らかの光が見えることを期待できないわけでもない。他人を傍観者的に覗きみるのではなく、ある出来事をきっかけとして同じ体験をし、お互いに傷つき合いながら本心をさらけ出すことで、そこになんらかの精神的な関係が築かれることを予感させられるものがあるからだ。

精神的なつながりの深化

夫婦間の精神的なつながりにおいても、この二作品「風呂」と「ささやかだけれど、役に立つこと」での違いが歴然としている。

The husband sat in the chair beside her. He wanted to say something else. But There was no saying what it should be. He took her hand and put it in his lap. This made him feel better. It made him feel he was saying something. They sat like that for a while, watching the boy, not talking. From time to time he squeezed her hand until she took it away.⁴⁾

「夫はその隣の椅子に座っていた。彼は何か違ったことが言いたかった。でも言うべき言葉が思いつかなかった。彼は妻の手を取って、自分の膝の上に置いた。それで彼は少し気が休まった。まるで何か慰めの言葉を言えたような気がしたのである。そんな格好で二人はしばらくそこに座っていた。何も言わず、じっと子供の顔を見ながら。ときおり彼は妻の手を強く握りしめたが、やがて彼女はその手を引っ込めた。」（「風呂」村上春樹訳）

これは目を覚まさず眠り続けるスコッティの

病状に不安を抱き、医者に「昏睡」ではないかと詰め寄る両親に対して、医者が昏睡ではないと否定をして病室を立ち去った後の、彼らがなんとも言えない不安を感じあい、寄り添うところの描写である。しかしこの時点ではハワードとアンの心の交流は十分ではないように見える。夫ハワードに握られた手を妻のアンは引っ込めてしまっている。

しかし「ささやかだけれど、役にたつこと」では二人の精神的なつながりに進展が見られる。

In a little while, Howard woke up. He looked at the boy again. Then he got up from the chair, stretched, and went over to stand beside her at the window. They both stared out at the parking lot. They didn't say anything. But they seemed to feel each other's insides now, as though the worry had made them transparent in a perfect natural way.⁵⁾

「程なくハワードが目を覚ました。彼はまた子供の顔を見た。そして椅子から立ち上がり、手足を伸ばし、窓際にやってきて彼女の隣に立った。二人は駐車所を眺めた。一言も口をきかなかった。でも、二人は互いをしっかり身の内に感じていた。あたかも心労が二人をことごとく自然に透明にってしまったみたいだ。」（「ささやかだけれど、役に立つこと」村上春樹訳）

書きすぎているとして「ささやか…」よりも「風呂」を評価する向きもあるが、引用した最後の部分の描写において、「ささやか…」の方には明らかに精神的な深まりが描かれている。ハワードとアンはお互いの不安や苦しみを身の内に感じる事ができたのである。

精神的なつながりを深めるためには、相手と同じ体験をしたり同じ境遇におかれたりしなければならない。ハワードとアン夫婦の場合は、彼らの一人息子スコッティの瀕死の病状という人生の緊急事態に直面するという体験である。時には相手の立場に踏み込み、傷つけてしまうこともあるかもしれない。覗き見的な傍観者から血の通う共感者へととならなければならない。そのとき必要なのは、覗き見するときの目ではなく、心を感じ取る洞

察力としての眼である。

Sam Halpert, P.O. ox 667 Layton, Utah, 1991

(「風呂」の頁数は“The Bath”, published by Kodansha Publishers Ltd. and Kodansha International Ltd.,1994,また「ささやかだけれど、役にたつこと」の頁数は“A Small, Good Thing”, Vintage Contemporaries, Vintage Books, A Division of Random House, Inc., New York, 1989 のものである。)

註

- (1) “The Bath”, 59 頁
- (2) “A Small, Good Thing”, 86 頁
- (3) 同上, 88 頁
- (4) “The Bath”, 53 頁
- (5) “A Small, Good Thing”, 70 頁 -71 頁

〈参考書〉

- 1)『ユリイカ』—変貌するアメリカ文学—、青土社、1987
- 2)『レイモンド・カーヴァーについて語るとき…』サム・ハルパート編、小梨直訳、白水社、1993

〈作 品〉

1. “The Bath”, published by Kodansha Publishers Ltd. and Kodansha International Ltd.,1994
2. “A Small, Good Thing”, Vintage Contemporaries, Vintage Books, A Division of Random House, Inc.,New York,1989
- 3.『愛について語るときわれわれの語ること』レイモンド・カーヴァー著、村上春樹訳、中央公論社、1990
- 4.『ささやかだけれど、役にたつこと』レイモンド・カーヴァー著、村上春樹訳、中央公論社、1989
- 5.『大聖堂』レイモンド・カーヴァー著、村上春樹訳、中央公論社、1990

〈研究書〉

1. ...when we talk about Raymond Carver Edited by